

『秋・冬の民俗』 ～記録映像解説～

日時：平成27年11月22日 午後2時～

会場：川田谷生涯学習センター

講師：桶川市歴史民俗資料館 紅谷有美

1. 年中行事

私たちは、二つの時間を生きている。この二つの時間の中で、らせんを描くように生活文化すなわち民俗は、繰り返しつつ変遷を遂げてきた。日本民俗学を主導した柳田國夫氏は、この民俗を変遷させる力は、祖先から営々と引き継がれてきた幸福追求の営みであったという。

民俗学では、後者の時間の中で営まれた人々の暮らしを重視する。

(1) 直線的に推移する時間

現在・過去・未来

行って返らぬ時間

歴史（ある日 ある時 ある場所で 誰が）

(2) 循環する時間

季節（春夏秋冬）

人生の階梯（誕生 成人 老年 死 先祖）

宗教的な世界観（輪廻転生）

2. 秋と冬

(1) 秋

社会通念・気象学：9月・10月・11月。

二十四節気に基づく節切り：立秋から立冬の前日まで

天文学上の区切りでは：秋分から冬至まで

・語源：禾つまりイネをたくさん穫り入れる、飽き満ちる

草木が赤や黄色に色づくようになり、そのアカ（紅）クなる

(2) 冬

社会通念・気象学：1月・2月・12月。

二十四節気に基づく節切り：立冬から立春の前日まで

天文学上の区切りでは：冬至から春分まで

- ・語源：殖ゆ・増ゆ（ふゆ）　じっと、力を蓄えている
冷（ひゆ）が転じた　寒さが威力を振るう（ふるう）

3. 秋・冬の民俗行事

●ささら獅子舞

武蔵国（埼玉県・東京都・神奈川県東部）ではよく残っている芸能で、市内では小針領家、松原、前領家、三田原地区の4カ所で残っている。飢饉や疫病を追い払うために始まった獅子舞は、悪魔払い・疫病退治の意味合いが込められており、秋祭りではいよいよ収穫を迎えるものの、台風といった水害や虫の害の心配も多く、無事に収穫できることを祈願して、神社に奉納したといわれる刈り上げの前の儀礼である。

●十日夜（トオカンヤ）

旧暦10月10日に行われる豊作を祈る収穫祭の一つ。この日子供たちは芋がらを芯に入れた藁束を縄で巻いたワラデッポウを作った。大根が抜け出す（大きくなる）というので、大根畑のそばで叩いたり、モグラを追い出すと言って、地面を叩いて歩く。地面を叩くときに、唱えごとをする風習があるが、地域によって唱えごとの内容は様々である。この日はボタモチを作る。

●百万遍

川田谷薬師堂の東光寺では、かつてその年に亡くなった方のために百万遍の供養をしていた。村全体から米を集めて団子を作り百万遍を唱え、大数珠を回す人たちに食べさせた。また、その年に亡くなった人のある家でも団子、ボタモチを作り、供養をしてくれる人たちにふるまっていたという。

●星祭り

かつて、冬至の夜、加納の浅間社では星祭りが行われ、昼のうちに鳥居、社、奥宮などに注連を飾り、午後7時半に神事が始まる。

一同お祓いを受け、神官（先達）の祝詞に続いて、御神徳を共に唱える。その後、神官は衣服を狩衣から山姿に改め、護摩火を点ずる。社殿内に火炉を設けて神に祈り、炎の上に護摩札を奉じて、神文を唱えながら煙の中にかざす。

続いて信者から寄せられた包み（衣類などが入っている）を同じようにする。

この炎、煙に暖まれば無病息災という。1時間余りで神事も終わり直会となる。神事の最後に供物やお酒を飲食することで神と人とが一体となることができると信じられていた。

●多気比売神社の七五三縄

市内で最古の神社。

境内正面の多気比売神社の大シイは、高さ13m、枝張り南北17m、東西14m、樹齢は600年と推定されている古木の風格漂うご神木である。歳末には氏子達によって太い七五三縄が作られ、神聖、清浄な場所を示す為に、前年の縄と張り替える習わしが続けられている。

●正月行事（年神様や先祖を迎える行事を行う大正月）

・煤払い

正月を迎えるにあたって、家の内外の煤（すす）や塵（ちり）を払い、清掃する煤払いを行う。平安時代にすでに行われていたといわれ、12月13日に行うようになったのは江戸時代から。江戸城は12月13日が煤払い日で、民間でも多くが13日を煤払いの日としていた。単なる年末の大掃除とは違い、年神様を迎える準備のための信仰的な行事。

・年神様の棚

正月を迎える神様である年神様は大晦日にはくるといふ。昔は神棚の前の天井に年神様をつるす棒があり、それにつるし、供え物をした。年神様をはずしても、その棒は一年中取り外さないで置くという。

・門松

「門松」は、新年に年神様が降りてくるときの目印。常緑の松は神が宿る木と考えられ、後に竹が長寿を招く縁起ものとして添えられた。玄関前に左右に飾り、向かって左側を雄松、右側を雌松と呼ぶ。

・しめ飾り

「しめ飾り」は、家の中が年神様を迎えるために清められた場所であることを示す。もともとは神社と同じように、しめ縄を張り巡らしましたが、次第に簡略化され、今はしめ飾りや輪飾りがよく使われている。

- ・鏡餅

「鏡餅」は年神様の居場所。家にお迎えした年神様の依り代（居場所）として「鏡餅」を飾る。昔から「餅」は神様に捧げる神聖な食べものとして、祝い事や祭りには欠かせないものであった。鏡餅は通常は11日に下げ、家族揃って雑煮やおしるこにして食べることで年神さまのお力をいただく。その際には刃物を使わずに手や槌で割り開くことから「鏡開き」・「鏡割り」といわれる。これにより、年末から続いていた一連のお正月行事が一段落する。

- ・七草粥

春の七草とは、芹（せり）、薺（なずな）、御形（ごぎょう）、繁縷（はこべ）、仏座（ほとけのざ）、菘（すずな）、蘿蔔（すずしろ）のこと。日本にはもともと、この日に若菜を神さまにお供えし、お下がりを頂き豊作を祈る風習があったが、そこに寒い冬を乗り越えて芽を出す若菜の力強さをわけてもらいたいという無病息災を祈る風習が重なり、七草粥を食べるようになった。

- 小正月行事（豊作祈願や家庭的な行事が多いのが特徴）

- ・削り花

正月14日ニワトコの木で作った削り花を飾る。ニワトコは春の初めに他の木よりも最も早く芽を出すので、祝いの木として使用されるといわれている。削り花はハナカキという器具で、ニワトコの皮、幹を削り、花のようにする。竹を細く割って花の形とつぼみの形のものはさみ神棚に上げます。

- ・繭玉団子

13日あるいは14日にナラの木かヤナギの枝を切ってくる。蚕を飼っているいる家では「繭」の形をした団子、米や芋の豊作を願ってその形をした団子をその枝にさして神棚に上げます。農家では特に肥料となる堆肥の上にも上げます。年神様に供えるのは特に大きな枝に団子をさすと言われている。

- ・成木責め

1月15日に柿の木の根本近くを鉈で切りつけ、大きな声で「柿がなるかならねえか、ならなきや鉈でぶっ切るぞ」と言う。柿は幹に傷をつけると豊作になるといわれていた。

- ・左義長

小正月に正月飾りや書き初めを燃やす行事で、その煙に乗って年神様が天上に帰ってゆくとされている。「どんど焼き」「とんど」とも呼ばれ、その火で焼

いたお餅などを食べると無病息災で過ごせるといわれている。このように年神様を見送って正月行事も無事終了となるので、1月15日を「正月事じまい」といい、15日までを「松の内」とする地方もある。

- ・恵比寿講

1月20日恵比寿様と大黒様を神棚から座敷におろし、枡に入れたり、台に飾り、尾頭付きの魚、錢箱、お酒などを供える。恵比寿様はこの日ご馳走を食べて働き、11月の20日に帰ってくるという。この日を二十日正月ともいい、この日で正月は終わりとされた。

4. うみだされる時間

- ・年中行事…農耕を営む上では、その栽培上の適時をわきまえなければならず、日本はことに四季の変化が鮮やかで、日本人は古くから季節について敏感であった。人々は、昔から生活の節目に、健康や安全、豊作、商売繁盛を祈り、先人を敬い、様々な行事を行ってきた。
- ・年中行事が「時間を作りだす」機能をもっていた。